
編集後記：昨年就役した新しい南極観測船「しらせ」が南極昭和基地への初めての航海を終え、この号が出ている頃には、もう日本に帰港していることでしょう。今シーズンは特に昭和基地周辺の海氷状況が厳しく少々時間がかかったものの、昭和基地には無事到達、越冬隊員を送り込み、物資の輸送を行ったとのこと。新しい船ですので、砕氷の仕組みなどが最新の知見や実験に基づき設計されていることも、幸いしたのでしょうか？紆余曲折があり先代「しらせ」との間に1年のブランクが開いてしまい、オーストラリアからの傭船によって観測はなんとか繋がりましたが、これから数十年間は、安定して欠けることなく南極観測が続けられることでしょう。

新しい船になり、船の大きさ自体は新旧でそれほど変わりませんが、収容できる観測隊員の数が増え、今回新たに学校の先生が観測隊同行者として南極に行かれました。昭和基地で、その小学校と高校の2名の先生は、衛星回線によるテレビ会議システムを使い学校や科学未来館を結んで、子供たちに「南極授業」を行いました。教えることを専門とする先生たちが現地で

見聞し肌で感じて学んだことは、子供たちに大いに伝わったに違いありません。帰国後も、その貴重な経験を生徒たちに伝え続けられることでしょう。そんな先生に教わったことにより、先生が乗った同じ「しらせ」で将来南極に行く子供がもしかするといるかもしれません。もしそうなれば素晴らしいことですが、そういうことがなくても、観測を続けることの理解には繋がるでしょう。

地道に観測を続けるためには、間があかないよう引き続き道具を用意すること、またそれ以上にそれを続ける人材や理解する人材を育てることが大事であることには違いありません。しかし人材の育成というものはすぐに結果が見えるものではないもので、脇に置かれ、おざなりになりがちではないでしょうか？そんな大上段にかまえることはないでしょうが、周りに理解していただくため、大事なことは大事だ、面白いものは面白いと、しっかり伝えていくことを常に心がけていたいものです。

(藤田 建)